

氏 名	はま の きよ し 濱 野 清 志
学位(専攻分野)	博 士 (教育 学)
学位記番号	論 教 博 第 134 号
学位授与の日付	平 成 20 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	「気」の心理臨床学的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 藤 原 勝 紀 准教授 皆 藤 章 准教授 角 野 善 宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、第Ⅰ部：イメージとしての「気」の拡がり、第Ⅱ部：「気」イメージ体験と主観的身体、第Ⅲ部：「気」のアイデンティティとその拡がりから成る。優れて心理的なイメージ、全体的存在としての個人の主観的身体、生きる主体のアイデンティティに関する研究成果を、「気」とイメージ・体験・身体を手がかりに論じる。

第Ⅰ部：イメージとしての「気」の拡がり。「気」の概念を緻密に検討する。

第1章：心理臨床学の対象としての「気」。日本語におけるイメージ喚起力に優れた言葉として「イメージとしての気」、「神秘的融即と気」、「気イメージの拡充」の視点から緻密に検討し、「気」の全体的イメージを輪郭づける。そこから、気は実体的存在ではなく、生きる人間のいまここでの体験に働くイメージを捉える有用な言葉の装置とする。形として捉え難いコミュニケーションの働き自体を捉えうる可能性について、臨床的事実を通じて議論の出発点を提起している。

第2章：性格表現用語に用いられる「気」。調査・統計的研究をもとに、性格表現用語としての気には、変換しやすく移ろいやすい側面、対人関係での注意の働かせ方に関わる側面、対人関係の関係自体を表す波長としての側面、エネルギー量が焦点となる性格の側面という4側面の結果を得ている。「気」という言葉の特性が、二人の人間関係のあり方に依存していること、集合的なオカルト的な面に傾きやすく、人格の個性が扱われにくい側面があることを指摘し、心理臨床との関係を検討する。

第3章：「気」イメージによる人間理解。心理臨床における人間理解との関連について、個人の主体性と気、拡散する気と集合する気、個と場をつなぐ身体などの視点から検討し、個人を個と集団、個と場という対立次元のどちらをも含む曖昧性が特徴であり、それを乗り越える動きとしての身体修行の問題へと展開している。「気」「気」イメージによる身体操作である「気孔」へと論の焦点を移し、身体性イメージ形成と気孔、気孔における気イメージ、気イメージ体験としての立つこと、気孔体験における他者の意義と心理臨床などのテーマを取り上げ本研究の焦点化をしている。

第Ⅱ部：「気」イメージ体験と主観的身体。「気」の視点を導入する人間理解における心身の不可分性を論じ、心理臨床における身体性をめぐる課題について実際事例に基づく検討を行っている。本論文の心理臨床学的研究としてのメインである。

第4章：心理臨床における主観的身体の意義。心理臨床の実践において心理臨床家が自分の身体をどのように生きるかの重要性を指摘し、それを「主観的身体」として独自に標準化することで、西洋近代医学が対象とする客観的身体とを区別しながら、個人の主観に映し出され、感じられ、経験される身体の心理臨床課題性を論じる。市川浩の身体の現象学、Mindell, Aのドリームボディの論考からも綿密に検討する。

第5章：「気」イメージと主観的身体。気孔練習者の丁寧な体験報告の記述をもとに、「気」イメージ体験の個別的イメージの表れを議論する。二名の詳細な体験報告を取り上げ、気孔練習が進むにつれて、言葉数が減り内的体験を大切に味わうプロセスを例証している。そこから、個々の身体性イメージの有りが具体的に捉えられ、そこに目を向ける作業そのものが、普段は意識にのぼりにくい主観的身体を自覚的に体験する意義があることを論じる。

第6章：事例研究 気孔を導入した臨床事例。学生相談事例の心理臨床面接過程（33回面接経過）において、それと並行して面接前に気孔練習を行った際の身体イメージ体験の詳細な記述に基づき、気孔体験を心理臨床面接に導入し生かす可能性を例証する臨床実践事例研究である。主観的身体の経験が、心理的な軸を作り、身体のゆるみとともに対人関係における心理的な境界線も柔軟性をえていくプロセスを読み取ることができる。気孔を通じて自己の主観的的身体を味わい、付き合い直していくことが、自己の身体が自分の意識的なコントロールを超えて信頼に値することを肌で感じるようになっていく。このことが自己が生きている中心感覚イメージの体験として重要な意義をもつことを例証する興味深い事例研究である。考察では、「気」イメージをとおして個人の人生を、個人内、個人間、身体内、身体間、トランスパーソナルな水準などの様々な水準からダイナミックに位置付けうる可能性にも言及する。

第7章：聴くことと身体。前二章の臨床事例現象を受けて、「気」の観点から心理臨床の在り方を見直し検討する。クライアントの存在を理解し、受けとめる「気を受けとる」視点から捉え、面接場面を準備し円滑な関わりを促進することを「場を整える」視点から議論する。「気を体験する」視点から、「気」のイメージを通して表れる身体は、心の主体的な働きにより、その働きの場にその人固有の在り方を実体化するような独特のリアルなイメージとして表れる。そうした主観的身体の体験により、自らの体験を大切にし、同時に異なる可能性をもった他者の主観的的身体を安定的に受けとめることが、心理臨床の関わり方の重要な姿勢であると考察された。

第Ⅲ部：「気」のアイデンティティとその拡がり。前章までの研究をつうじた「気」イメージの視点から見えてくる心の世界に関する展望がなされる。個人の心に限定されず、環境世界と有機的につながる存在全体における幅広い心の世界へと拡充していく視点の重要性へと展開される。

第8章：「気」のアイデンティティ。ある特異な才能（右手の平に透視的なイメージ体験をする）をもつ気孔実践者との面談報告をもとに、人生が「気」の視点により大きく変容していった体験に注目し、「気」は個人の体験を語るものでもあり、同時に集合的な体験を語る言葉ともなる。個アイデンティティがより大きなものとつながったバランスのよい新たなアイデンティティ形成と拡がりに焦点をあて議論される。

第9章：気からみた主体の生成。前章でみたアイデンティティの正常な二重見当識の概念を検討し、「気」からみた主体性は、個人に閉じたものではなく、個人が環境に開かれ、その応答を自分の一部と受けとめるところに生成されるとする。気孔における東洋の錬金術としての内丹術を中心に、ユング理論にも触れながら展望する。

第10章：気からみた個人と環境。「気」が個人の内的現象を超え、天地自然の現象を表す生きた環境と関連づけ、心理臨床において、主体が生きる足場こそが主観的的身体であることの重要性を指摘し、心理臨床で扱う主体性への真摯な展望を試みる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「気」をキーワードにして心理臨床の営みを振り返り、人間が主体的に生きる上で必要な視点を取り出しているように自然な発想に立った斬新な開発的研究である。一般に心理臨床は、心をキーワードに理解されているが、その営みが専門的な人間関係を通じた人間が生きることに照準をおく以上は、からだ・生身といった身体性の問題が不可避のテーマになってくる。本研究は、この自明ともいえる心身一如的な視点から、果敢に心理臨床の営みの本質に迫るものであり、西洋近代医学における客観的な身体ではなく、東洋の錬金術ともいえる気孔体験という自らの実践に立脚した身体観から、人間存在の全体性に向かう可能性への新鮮で斬新な提言を含むものである。心理臨床の営みが、生身の全体として生きる人間理解と援助であることを考えるとき、本研究は、身体と心の融合を懸け橋する自然な人間事象に照準をおいた貴重な視点を提供するものであり、臨床心理学から臨床実践に根ざした新しい学問としての心理臨床学を構築するための方向性を示唆する論文として高く評価できる。

本論文は、三部から構成され、全10章から成っている。

第Ⅰ部は、イメージとしての「気」の拡がりとして「気」に関する主に概念的な検討が丹念に行われたものである。第1章：心理臨床学の対象としての「気」において、日本語の気という言葉のもつ優れたイメージ喚起力に触れ、その綿密な概念的検討を踏まえて、「気」の全体的イメージを輪郭づけている。そこから「気」は実体的存在ではなく、生きる人間

のいまここでの体験に働くイメージを捉える有用な言葉の装置であると提起する。心理臨床研究で最も困難を極める内的なコミュニケーションの働きを捉える上での「気」の可能性について論じ、議論の出発点を丁寧に示している。第2章では、「気」に関する調査・統計的研究を提示し、性格表現用語に用いられる「気」について4側面を抽出し、「気」に関する概念に精緻な検討を加えながら、心理臨床への新しい視点としての可能性を慎重に提案している。続く第3章は、「気」イメージによる人間理解と題して、心理臨床の実践研究に導入する視点と課題について、「気」から「気」イメージへと焦点を無理なく移しながら、実践的な「気孔」という方法論的な観点を提示する。第I部は丁寧に研究仮説の提示といえる。

第II部では、「気」イメージ体験と主観的身体という題目になり、いよいよ実際の心理臨床実践研究へと分け入っている。まず「気」の視点を導入する人間理解における心身の不可分性を論じ、心理臨床における身体性をめぐる本質課題について実際事例体験に基づく詳細な検討を行っていく。本論文の心理臨床学研究としての真髓とすべき研究成果が示され、極めて説得力に満ちた論理展開となっている点が高く評価された。内容的には、第4章では、著者自らの心理臨床面接での体験に着目し、その臨床実践的な視点として「主観的身体」というキーワードを提示している。この視点は、実際の面接関係で心理臨床家に生じる身体感覚的な主観的・個人的な体験を、生身の面接コミュニケーションの手がかりとして用いる可能性を示唆するもので、臨床実践研究上の仮説課題と考えることができる。そこで第5章では、生きた研究仮説としての可能性について、実際の気孔練習者2名の詳細な体験報告の記述に基づく検討を行い有効性を例証している。続く第6章では、いよいよ心理臨床面接事例研究に至る。この事例研究は、面接セッションの前に気孔練習を行い、その後に独立した心理臨床面接を実施する方法により、主観的身体に関する内的体験つまり「気」イメージの観点から、気孔セッションと面接セッションでの体験プロセスを記述し分析したものである。その結果、気孔を通じた自己の主観的身体の経験が心理的な軸を作り、身体ゆらぎに並行して対人関係の円滑な距離感に柔軟性がえられるといった、両者に不可分な変容過程が生じたことが例証された。また面接過程を通じて、クライアントの内に、自己が生きている中心感覚イメージの実感体験へと結びつくという重要な知見が提起される。さらに第7章において、心理臨床におけるキーワードである「聴くことと身体」をテーマに取り上げ、主観的身体が聴くことにおいて如何なる働きをするかに言及し、ここに至って心理臨床における身体性の問題が、主体の内的体験に即したリアリティに関係する重要課題であることを示唆している。

第III部は、「気」のアイデンティティとその拡がりとして、これまでの研究から見えてきた展望となっている。それらは第8章「気」のアイデンティティ、第9章「気からみた主体の生成」、第10章「気からみた個人と環境」として、主体が生きる根源に、個を超えた他者及び広大な自然環境を含めた「主観的身体」の主体的な足場機能があること、そこに心理臨床の営みの重要な照準があることを自由かつ真摯に展望し、論文を締め括っている。

以上、本論文は、「気」に関する言語の極めて緻密な検討による研究仮説の提示から、「気」を「気」イメージへと展開し、生きた心理臨床研究仮説へと課題生成を図り、心理臨床学の方法論へと丹念な検討を行い、臨床事例研究に至ったプロセスにみる困難な臨床実践研究の成果であり、心理臨床研究における身体性の問題に「主観的身体」という具体的な視点を提示し実際的な例証を行った点で、また極めて示唆的で新しい研究仮説生成の可能性を膨らませることに寄与することが期待される点で高く評価された。ただ「気」、「気孔」という方法や視点と心理臨床面接という方法との間には検討すべき課題が発見された段階という印象もあり、視点を導入する研究から今後は心理臨床面接に主軸をおいた研究へと展開する必要があるとの指摘もあった。また第III部の展望では、「気」・「気孔」の視点から展望するあまり心理臨床の文献的研究に不十分な面があるとの指摘もあったが、これらの指摘は、身体性の問題について心身二元論を超えて心身一如と簡単に言えても、実際には未曾有の困難性を含む研究課題であるところに起因するものと考えられ、本研究の心理臨床学研究への希望に満ちた価値を害するものではなく、むしろ今後への期待感に寄るものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成19年11月28日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。